

わが国では、量的・質的緩和政策(QQE)導入以降、国債需給がタイト化する中で、国債市場の流動性が注目を集めている。加えて、海外でも、高頻度取引等による米国金利の急変動などシステムックな金利の動き等が注目されている。そこで本研究では、日銀ネットの(現物)国債決済データを用いて、ネットワーク分析を行うことで、国債市場の流動性やシステムックリスクについての理解を深めることを目指す。具体的には、①QQE導入以降の国債市場の構造変化と②金利急上昇時(VaRショック、QQE導入直後)における取引動向を分析した。その結果、QQE導入以降、短期債から中長期債まで順を追ってネットワークが縮小する動きが見られた。また、金利急上昇時に共通して、主要機関が普段取引のない周辺機関にも国債を広く売り捌くことが示され、市場の安定には周辺機関の買入れ余力やネットワーク構造も重要なことが確認された。